

写真: 香港の日系スーパー  
(カットフルーツ売り場)



## 果樹産業の動向

### - 目次 -

#### 果樹産業の動向

・2016年世界のリンゴ産業  
10大ニュース 1

・台湾消費者を覆う食品安全  
意識 3

・2016/17年世界のキャン  
ディ需給 4

#### 現地報告

豪州 7

フランス 7

タイ 8

#### トピックス

・品種Sumo 8

果物を食べて  
応援しよう!

被災地を応援

## 2016年リンゴ産業10大ニュース

The World Apple Report 誌 (2017年1月号)

本誌は毎年、前年に起きた様々な世界の出来事を回顧し10大ニュースをリストアップしている。

長期的に影響を及ぼすと思われる最も重要な出来事は、しばしばその事実が起きたときに大きな見出しで報じられるような出来事ではないことが多い。発生した時にはそれ程注目もされなくても時が経つにつれ、徐々に世界規模あるいはビジネス環境に大きな影響力を及ぼすという例が多い。2017年の始めに当たり、本誌が選んだ2016年の10大ニュースは以下の通りである。

### 1. 世界経済の低迷

経済の低迷は欧州の広い範囲、中東、アジア、ラテンアメリカ及びアフリカで広まっている。これら地域の主要国であるロシア、ブラジル、サウジアラビア、南アフリカといった国々の経済成長はマイナスとなっている。また、米国、ドイツ、中国でも経済成長の動きは緩慢で、世界経済の成長を引っ張るだけの力強さは見られない。長期的な世界経済低迷の原因は、人口増加率の減速と生産性の低下であり、今後の経済成長の伸び率は低下せざるを得ない。今後も世界のリンゴ生産が増大を続ける中で、販売環境はますます厳しくなるだろう。

### 2. グローバル化と世界貿易への逆風

世界的な経済停滞の結果、グロー

バリゼーションや自由貿易の拡大の動きに急ブレーキがかかっている。グローバル化は中産階級と労働者階級の犠牲の上に多国籍企業と富裕階級だけがメリットを享受しているとの勢力があるからだ。このような中、EUのような多国間共同組織の弱体化が起きている。英国は、EUから離脱することとなり、今後いくつかのEU加盟国が英国の後を追うことも考えられる。経済的逆風は、これ迄の国際貿易取り決めの否定を主張する政治勢力を勢い付け、環太平洋連携協定(TPP)や環大西洋貿易投資連携協定(TTIP)といった国際的取組に対する揺り戻しが強まっている。第二次世界大戦後の60年間、西側諸国のリーダーによって推進されてきた国際貿易の自由化への取り組みを否定し、限られた超大国による管理貿易の時代に突入しかねない状況である。

### 3. 独裁体制化のうねり

自由貿易の枠組みが世界各地の独裁政治体制により脅かされている。イラン、北朝鮮及びキューバは長年にわたり世界の除け者であった。しかし、近年2つの大国、中国とロシアが徐々に独裁国化しつつある。この他、小さな国々でも一党独裁あるいは独裁主義者の権力掌握がみられる。具体的には、東南アジアのタイやマレーシア、中東のエジプトやトルコ、西アジアのカザフスタンやウズベキスタン、ラテンアメリカのベネズエラ、東欧のハンガリーやポーランドなどである。幸いこういった独裁化の動きが世界的規模で見られるわけではな

い。アジア、アフリカ、中南米の小国の多くで、自由民主主義を目指す動きもみられる。今後、独裁化の途へ進むのか自由民主主義への途を採るかは、ひとえに西側の大国が経済を立て直せるか否かによる。

#### 4. トランプ革命

2016年の世界最大の出来事は、大方の予想を覆しドナルド・トランプが米国大統領の座を射止めたことであろう。トランプは、米国の内政外交の両面にわたって政策体系を覆すと主張している。米国の果樹産業は、トランプのいう減税と規制撤廃によってメリットを受けることもあろうが、一方で移民政策と自由貿易に反対するスタンスによりダメージを受けるだろう。トランプは、主要貿易相手国が不公正な競争によって利益を上げているとして厳しく対応するとしている。これは他の諸国の果樹産業に大きな影響を与えることになる。さらに不安を惹き起こしているのが、トランプが何をしようとしているのか、具体像が明らかにされていないことである。先行きが見通せないことから、業界は将来の計画を立てられないでいる。

#### 5. 中国経済の減速

過去30年、中国はかつて例のない速さで成長を遂げた。その過程で、貧困の解消が進み、中産階級が大きく増大した。しかし、今後も引き続き急成長を続けるだろうと見通していた人達は誤りに気付かされ、最近の中国経済の急減速に驚いている。中国の輸出入の伸び率は2011年以降劇的に減速し、2015年以降実績数値の落ち込みが明らかになっている。中国の輸入の減少は、原材料や機械設備を供給してきた多くの国に深刻な打撃を与えている。生鮮果実を含む消費財の輸入もマイナスに転じている。加えて、長期的なより大きな脅威は、アジアを中心とした地域への攻撃的態度である。世界貿易に及ぼす悪影響の増大で、豊かになっ

た中国消費者の需要増大に販路拡大を期待している世界の果樹産業は、将来の見通しが損なわれてしまう。

#### 6. 好戦的なロシア：制裁の継続

2000年以降ロシアは急速に生鮮リンゴを含む様々な果実輸入を増大させてきた。しかし、ロシアの購買力は2014年以降の原油価格の下落、クリミア併合等に対する西側諸国による経済制裁により大きく損なわれている。2014年8月、ロシアはEUからの生鮮食品の輸入を禁止した。これは、ロシア向け輸出に大きく依存していたポーランドのリンゴ産業に壊滅的打撃を与えた。禁輸措置はその他の国々のリンゴ輸出にも大きな影響を与え、ロシアに代わる販路を探さなくてはならなくなった。この状況は2016年8月になって3年目に入り、依然先行きが見通せない。これによりダメージを受けているのはロシアの消費者とEUの生産者である。ロシアは引き続き西側の貿易相手に対し対決姿勢を続け、西側では状況の打開策を巡る意見の対立が明らかになってきている。このような視界不良な状況は2017年も世界の果実貿易に影を落とす続けるだろう。

#### 7. 中東の混乱

中東及び北部アフリカの諸国は、一時果実・野菜の成長市場として国際市場に登場したが、その後、宗教的対立、政治的緊張、テロリズム等に脅かされている。さらに原油価格の下落が影を落としている。2016年末、過激派組織のISISは敗北の瀬戸際まで追い詰められたが、その残党は近隣諸国に逃げ延びた。シリアとイエメンでは依然政府軍と反政府勢力の軍事衝突が続く、中東の大国サウジアラビア、イラン、トルコによる打開策模索が続いている。一方、サウジアラビアは原油輸出に頼ってきた経済構

造の変革に取り組み始めている。もしこの取り組みが成功すれば、中東地域の再活性化の青写真となり、アラブの若者に過激思想に代わる途があることを示すことが出来る。

#### 8. 小売業界の大転換期

小売店は依然として青果物の生産者と消費者を結びつける重要な結節点である。小売業界は消費者をいかに惹き付けるかに苦闘し、また従来型の小売店はアマゾン等によるインターネット販売との間で激しい競争に巻き込まれている。主要な小売企業の所有権は転々とし、業界の構造は変化の過程にある。食品流通においてオンライン販売の比率は未だ小さなものではあるが、アマゾンはシェアを伸ばすための様々な経験を持っている。オンライン店舗を持たない従来型の小売企業は、自らの領域を防御するためにオンラインに代わる代替策をいかに提供できるかを模索している。勝負のポイントは食品や日持ちの短い野菜等を顧客に迅速にどう届けるかである。オンライン店舗と従来型の店舗の戦いは、小売業と食品供給業のあり方にさらなる変化を迫ることとなるだろう。

#### 9. リンゴ品種の増大

リンゴ生産の歴史を見ると、市場競争の勝者は、「レッドデリシャス」や「ゴールドデリシャス」といった一般的な品種より高品質なリンゴ品種を生産することに成功した者である。依然として効率的生産、高品質生産の重要性は変わらないものの、新しいプレミアム品種の登場によって、市場での勝者と敗者の関係は劇的に変化した。プレミアム品種のほとんどは、生産への新規参入を制限し、高い賦課金を課す「クラブ」によって管理されている。市場で成功を収めたプレミアム品種の生産者は、一般的な品種に倍する収益を上げ、それを元手にパッキングや販売システムの改良への投資を行い、クラブへの影響力を強

化することで優位性を向上させている。小売業者は販売収益の増大をもたらしてくれる品種を歓迎し、世界各地の育種家は新たなプレミアム品種の作出に精を出すことで、この動きはますます強まっている。多くのクラブは、ライセンス生産の下で市場供給量を抑え、希少性を維持し、プレミアム価格を確保しているが、問題はそのようなプレミアム品種の数が急増していることだ。この傾向はリンゴ産業に様々な長期的問題をもたらしている。具体的には、①個々のクラブ品種の希少性を維持出来たとしても、似たようなプレミアム品種が市場に出回る中で希少性原則を維持できるのか、②小売業者がクラブ品種を在庫として持とうとし、伝統的な一般品種のマーケットシェアは落ち込まないか、③クラブ品種を生産できな

い生産者は生き残れるのか、④安い一般的品種のリンゴの市場供給量が落ち込んだ時、所得の低い消費者のリンゴ消費量はどのくらい減少するだろうか、⑤その結果、小売業者はリンゴの取扱量を減らすのではないだろうか、である。

#### 10. 有機栽培リンゴの増加

多くの国で、高所得層を中心に有機食品への需要が高まっている。多くの消費者は、伝統的な旧来の食品に比べて有機栽培食品は健康的であり、環境にも優しいと考えている。リンゴは有機栽培生産の基準に従って容易に栽培できる果実の一つで、恵まれた位置にある。有機栽培リンゴは、旧来方式の栽培による価格に対して平均して3分の1のプレミアム価格を

享受している。これは有機栽培による掛かり増しコストをカバーし、有機栽培への取組意欲に報いるのに十分である。しかし、有機栽培農産物の将来は依然定かに見通せない。現在は需要が供給を上回っているが、有機農産物の割高感が価格に敏感な消費者に購入をためらわせ、生産者は気象条件の困難さから有機栽培物への転換を躊躇している。さらに、小売業界が地場産農産物の供給力の強化に努めており、消費者は価格の安い地場産物に対して有機栽培物と同じような物だとの姿勢でいるからである。有機栽培農産物の売れ行きを見ると、経済状況の如何によって影響を受けており、この先不況がおきれば有機栽培リンゴの需要もどうなるか分からない。

## 台湾消費者を覆う食品安全意識

ASIAFRUIT 誌(2016年12月・2017年1月合併号)

台湾政府が福島原発災害によって影響を受けた日本の農産物について、5年間続けてきた輸入禁止を解除することを検討していることから、消費者は安全性に対して懸念を抱いている。新聞報道では放射能汚染に対する消費者の懸念は非常に強く、昨年11月、内閣が開催した公聴会は抗議によって妨害され大混乱に陥った。

台湾は、福島原発のメルトダウンによる放射能汚染に対応して、福島、茨城、栃木、群馬及び千葉の各県からの食品の輸入を停止した。しかし、伝えられるところによると日本からの圧力を受け、台湾政府は、2016年末に向けて厳格な管理と検査を行いつつ、2段階で輸入禁止を解除する計画を発表した。この動きは、システムの不備を浮き彫りにした一連の食品安全スキャンダル以降、政府への信頼を失っている消費者の食品安全意識に警報を鳴らした。

過去5年間、マスコミは飲料、ジャムなどに含まれる可塑剤、汚染さ

れたでんぷん製品、偽造されたオリーブオイル、食用油に混ぜられた罹病した動物由来物質について報道してきた。政府は厳しい罰則措置、食品安全局の創設、台湾食品医薬品局職員の増員で対応したが、消費者は依然として懐疑的である。

専門家は、台湾の食品供給は驚くほど無秩序で、食品供給業者のおよそ3分の2が政府の規則に捕捉されないで営業しているという。また、日本産の農産物に関しては、輸入が禁止されている県からの食品が東京で再梱包され、また、偽造された原産地証明書を貼付して台湾へ輸出しているという噂が飛び交っている。

「人々は騙されたと感じている」と、農産物供給業者のチャン氏らは述べている。「マスコミの報道によれば、台湾女性の75%は日本の食品を二度と安易に信用しないと考えているそうだ。ほとんどの台湾人は、福島産農産物の輸入禁止を解除するという政府の政策に

反対している。消費者は放射能の影響を心配しており、政府の検査に納得していない。コンテナの5%の製品しかチェックされておらず、安全性を住民に納得させるには十分ではない。この問題は、全ての日本産果物に対して非常に大きな影響を持っている。消費者は、代わりに日本以外の国からの農産物に目を向けている。これは旧正月まで続くと考えられる」と語っている。

このことはライバルの輸出国にとって旧正月を前にした良いニュースである。輸入業者によれば、旧正月の高級輸入果物に対する需要は普段より200%以上増えるそうだ。果物は伝統的に贈り物とされ、また台湾の出稼ぎ労働者200万人が中国本土から里帰りするからだ。加えて、昨年9月に2つのスーパー台風が台湾の東部および南部の主要な果実生産地域を直撃し、供給量、品質及び価格に影響を与えた後だけに、輸入果物に対する旧正月の需要は昨年比

べて増えると予想されている。

予算会計統計局によれば、12月初め、悪天候による影響が長引き、継続的な生産量の不足が台湾産の果物と野菜の価格をそれぞれ38%及び10%押し上げたそうだ。

「(台湾産の)低品質と高価格によって、台湾の消費者は国内産よりもむしろ輸入果物を選択するだろう」とチャン氏は述べ、「今年の旧正月は輸入果物に対する客の関心は高いだろう」と予測している。

日本のリンゴは台湾の消費者の間で歴史的に旧正月の買い物であり、赤いリンゴは平和、幸運及び幸福を意味している。しかし今年は違う。市場は他のリンゴ輸出国に広く解放されている。チャン氏は、今年はチリ産と米国ワシントン州産のリンゴが大きな利益を得ると考えている。

「ワシントン州産のリンゴは、低価格及び保存可能期間の長さのため、台湾市場で失敗することは決してない。チリ産リンゴは、(日本産)フジの入荷が減少すると見込まれるため、昨年よりも販売は

増えるだろう」と語っている。

今年の旧正月1月28日は例年より時期が早く、より多くの輸入果物と入荷時期がマッチする見込みだ。これにはブドウ(多産を象徴)、タンゼリン(富)、サクランボ(幸運と幸福)、メロン(多産)が含まれるとチャン氏は述べている。

チャン氏は、「メロンは甘さが台湾人の味覚にアピールするので、特に良い成果を上げるだろう。また、チリ産サクランボは昨年匹敵する販売量で、高価格にかかわらず購入されるだろう。ペルー産ブドウは台湾産と時期が重複するので販売量は品質と価格に左右されるであろう」と見ている。一方、「これらの輸入果物は、パパイヤ、ナシ、オレンジ等、天候による影響を受けなかった台湾産果実と競合するということも想起しなければならぬ。このため、もし価格が消費者の期待する品質にマッチしなければ、台湾産果実に負けてしまう恐れがある」とも指摘している。

この他、チャン氏は、「ニュージーランド産のリンゴやアボカドなどの新しい輸入産品は昨年を通して販売が好調であったが、今年も継続するだろう。一方、中国産は過去数か月間

で最も大きな利益を得ており、他の国からの輸入品と競合している。台湾は陝西省、山東省からの中国産キウイの輸入を認めたが、これはニュージーランド産のキウイの販売に影響を与える可能性がある。中国産のサクランボは豪州からのサクランボ輸入を皆無にする可能性を持っている」とも見ている。

チャン氏によれば、現時点は台湾の果物輸入にとって先行き不透明な時期だそうだ。消費者は政府の輸入手続きを信頼していないため、政府は手続きをより厳しくしつつある。その一方、消費者は検査に自らの金を投入することで食品安全を確認しつつある。こういった動きは、例え供給業者が誠意をもって農産物を輸入しても、(消費者や政府からの)様々な訴追を受ける可能性を高めている。

「輸入貿易は健全ではない。関税は高すぎ、検疫手続きは複雑かつ難しい。現在の状況は供給業者に大変な不利益を及ぼす可能性がある」とチャン氏は締めくくった。

## 2016/17年世界のカンキツ需給

米国農務省海外農業局ホームページ (2017年1月25日公表)

### <オレンジ>

世界の2016/17年の生産量は、前年より240万トン増加し、4,960万トンに達すると予想される。これはブラジルが増加し、中国、米国の減少分を十二分に補うためである。加工仕向量はブラジルの生産量が増加するため280万トン増加すると見込まれる。一方、輸出量はあまり増加しない。これは、生産増が加工仕向増に繋がるためである。

**ブラジル**の生産量は前年を27%も上回る1,820万トンと予測される。これは天候に恵まれたためであり、開花、着果が順調であった。加工仕向量は前年数量の1/3相当が増加し、1,290万トンと見込まれる。国内生鮮消費量も生産増に伴い増加する模様だ。

**米国**の生産量は、フロリダ州でカンキツグリーンング病の影響が顕著であることから、前年を47万トン下回る490万トンと予測される。フロリダ州の生産量は全米の約60%で、カリフォルニア州が約40%である。フロリダ州産は大部分が加工に向けられ、カリフォルニア

州産は生食用に向けられる。国内生鮮消費量は8%増加し、輸出量は若干減少する。加工仕向量はフロリダ州の減産により減少する。

**EU**の生産量は、冬期の干ばつとイタリアにおけるトリステザウィルス被害により、前年を19万トン下回る610万トンと予測される。輸入量と加工仕向量に大きな変化は見られないものの、域内生鮮消費量は生産量の減少から落ち込むと見込まれる。

**メキシコ**の生産量は若干減少すると予測される。国内生鮮消費量は、生産量の減少と加工仕向量の増加から減少すると見込まれる。

**南アフリカ**の生産量は前年と同程度と予測される。輸出量もほとんど変化はないが、依然として世界の貿易量の25%程度を占めている。主な輸出先はEU、ロシアである。

**モロッコ**の生産量は、前年を4%上回る96万トンと予測される。これは生産面積の増、単収の増、灌漑施設の整備によるものである。国内生鮮消費量に変

動はないが、輸出は増加すると予測される。

### 世界のオレンジ需給

(単位：1,000トン)

国名	2011/12	2012/13	2013/14	2014/15	2015/16	2016/17 1月予測
生産量						
ブラジル	20,482	16,361	17,870	16,716	14,320	18,197
中国	6,900	7,000	7,600	6,600	6,900	6,200
EU	6,023	5,890	6,550	5,954	6,241	6,050
米国	8,166	7,501	6,140	5,763	5,362	4,892
メキシコ	3,666	4,400	4,533	4,515	4,400	4,375
エジプト	2,350	2,450	2,570	2,635	2,930	3,000
トルコ	1,650	1,600	1,700	1,650	1,800	1,855
南アフリカ	1,466	1,659	1,723	1,645	1,560	1,560
モロッコ	850	784	1,001	868	925	960
アルゼンチン	565	550	800	800	800	650
ベトナム	531	521	532	590	590	590
オーストラリア	390	435	430	430	455	470
コスタリカ	326	315	220	335	335	345
グアテマラ	160	152	154	160	160	160
イスラエル	116	73	69	86	105	115
その他	156	160	190	193	192	191
合計	53,797	49,851	52,082	48,940	47,075	49,610
輸入量						
EU	848	883	819	927	964	960
ロシア	495	512	469	440	470	480
サウジアラビア	348	274	274	448	435	440
中国	98	88	88	146	220	300
香港	188	217	230	256	286	295
アラブ首長国連邦	196	201	220	233	221	225
カナダ	190	199	183	190	204	210
イラク	196	169	189	180	189	190
米国	119	139	143	155	164	155
韓国	173	152	100	111	154	130
日本	127	113	87	83	100	110
マレーシア	96	104	100	102	100	100
スイス	62	68	63	67	71	75
ウクライナ	122	133	106	69	73	75
ベトナム	54	38	71	36	60	60
コスタリカ	91	77	56	35	52	55
シンガポール	44	45	48	46	44	45
ノルウェイ	36	38	34	36	38	40
トルコ	31	29	33	45	37	40
オーストラリア	18	20	16	30	30	30
グアテマラ	54	51	31	24	31	30
メキシコ	35	28	26	26	25	25
ブラジル	13	15	17	18	16	16
モザンビーク	34	35	7	11	6	10
南アフリカ	0	0	13	13	1	10
その他	0	0	0	0	4	0
合計	3,668	3,628	3,423	3,727	3,995	4,106
輸出量						
エジプト	900	1,000	1,100	1,200	1,450	1,520
南アフリカ	1,088	1,162	1,144	1,160	1,040	1,050
米国	695	678	506	522	655	640
トルコ	357	244	349	305	371	370
EU	279	322	346	297	319	300
オーストラリア	133	127	126	156	208	230
モロッコ	138	82	111	130	92	120
香港	67	45	49	74	107	110
アルゼンチン	85	77	76	72	60	55
メキシコ	19	31	47	44	54	55
中国	129	83	108	53	74	50
ブラジル	20	20	20	30	28	28
シンガポール	6	7	9	8	8	8
イスラエル	13	7	6	6	7	6
ロシア	1	1	2	2	3	3
その他	2	3	3	2	2	2
合計	3,932	3,889	4,002	4,061	4,478	4,547
国内生鮮消費量						
中国	6,349	6,405	6,865	6,043	6,446	5,900
EU	5,536	5,382	5,549	5,333	5,599	5,400
ブラジル	7,255	5,421	6,035	5,199	4,802	5,333

メキシコ	2,852	2,887	3,312	2,947	2,771	2,645
トルコ	1,224	1,290	1,284	1,310	1,366	1,425
エジプト	1,365	1,365	1,385	1,350	1,380	1,380
米国	1,526	1,492	1,357	1,263	1,259	1,362
モロッコ	652	642	820	688	778	778
ベトナム	585	559	603	626	650	650
ロシア	494	511	467	438	467	477
サウジアラビア	348	274	274	448	435	440
アルゼンチン	376	360	524	450	474	350
イラク	287	261	302	296	304	305
アラブ首長国連邦	196	201	220	233	221	225
カナダ	190	199	183	190	204	210
その他	1,604	1,679	1,490	1,437	1,525	1,535
合計	30,839	28,928	30,670	28,251	28,681	28,415
加工仕向量						
ブラジル	13,220	10,935	11,832	11,505	9,506	12,852
米国	6,064	5,470	4,420	4,133	3,612	3,045
メキシコ	830	1,510	1,200	1,550	1,600	1,700
EU	1,056	1,069	1,474	1,251	1,287	1,310
中国	520	600	715	650	600	550
南アフリカ	249	369	471	403	426	425
アルゼンチン	104	113	200	278	270	245
コスタリカ	240	220	136	220	230	240
エジプト	85	85	85	85	100	100
トルコ	100	95	100	80	100	100
その他	226	196	200	200	180	187
合計	22,694	20,662	20,833	20,355	17,911	20,754

年産は、北半球は11月→10月、南半球は翌年

### <オレンジジュース>

世界の2016/17年のオレンジジュース生産量は、ブラジルのオレンジ生産量が過去30年来の不作状態から急回復したため、65度ブリックス換算値で200万トンに拡大すると予測される。消費は米国と中国が先導する形で減少すると見込まれる。在庫量はブラジルで倍増することから、全体では15%増と見込まれる。

米国の生産量は、加工仕向量の減少から、2.8万トン減少し35.5万トンと予測される。輸入量は2万トン増加し、30万トンと予測される。

ブラジルの生産量は、オレンジの生産増により、4.4%増加して120万トンに達すると予測される。輸出量は26%の増加が見込まれる。

メキシコの実産量、輸出量は、3%増加すると予測される。

EUの実産量は若干増加するが、輸出入量は変化がないと予測される。

### 世界のオレンジ果汁需給

(1,000トン(65°Brix換算))

国名	2011/12	2012/13	2013/14	2014/15	2015/16	2016/17 1月予測
生産量						
ブラジル	1,263	980	1,230	1,006	848	1,222
米国	681	607	476	438	383	355
メキシコ	83	151	126	159	165	170
EU	82	83	114	97	100	101
南アフリカ	26	39	48	42	45	44
中国	40	45	55	50	46	42
トルコ	9	8	9	8	9	9
その他	28	21	25	31	22	25
合計	2,211	1,934	2,084	1,831	1,617	1,968
輸入量						
EU	840	815	742	890	777	775
米国	160	302	300	330	280	300

カナダ	101	103	98	91	97	95
日本	82	65	63	86	73	80
ロシア	51	47	45	38	37	38
中国	60	59	57	49	40	33
オーストラリア	30	34	32	32	32	32
その他	61	61	53	47	54	49
合計	1,384	1,486	1,391	1,563	1,390	1,402
輸出量						
ブラジル	1,150	1,110	1,200	1,153	870	1,097
メキシコ	79	143	121	153	158	163
米国	110	114	113	81	66	65
EU	51	54	57	50	52	50
南アフリカ	18	22	31	45	52	36
その他	30	29	30	30	31	31
合計	1,438	1,472	1,552	1,511	1,230	1,442
国内消費量						
EU	871	844	799	937	825	826
米国	699	733	700	674	634	613
カナダ	96	99	94	88	94	92
日本	76	70	68	80	78	78
中国	102	115	111	99	83	73
オーストラリア	39	41	40	40	40	39
ブラジル	44	45	35	35	38	38
その他	131	123	112	102	100	101
合計	2,058	2,070	1,960	2,054	1,892	1,860
期末在庫						
米国	322	384	347	360	323	300
ブラジル	509	334	329	147	87	174
日本	20	15	11	18	13	15
EU	15	15	15	15	15	15
南アフリカ	3	13	25	16	3	5
その他	23	9	6	6	7	7
合計	892	771	733	561	447	516

年産は、北半球は11月→10月、南半球は翌年

### <タンゼリン/マンダリン>

世界の2016/17年の生産量は、中国で減少したため、EU及びモロッコで増加したものの、前年を1%下回る2,840万トンと予測される。生鮮消費量は、生産の減少から若干減少し、輸出量は変化ないと予測される。

米国の生産量は、カリフォルニア州、フロリダ州とも増加し、全体では前年を4%上回る89.9万トンと予測される。国内生鮮消費量の拡大は生産の増加によるものであり、輸入の増加が原因ではない。

中国の生産量は90万トン減少し、1,930万トンと予測される。これは、カンキツグリーンング病と天候不順の影響である。この結果、国内生鮮消費量と輸出量も減少が見込まれる。中国は世界の生産量、生鮮消費量の2/3を担い、輸出量の1/4を占めている。

EUの生産量は、スペインで気象条件に恵まれたことから24.8万トン増加し、330万トンと予測される。域内生鮮消費量と輸出量は生産増を反映して増加が見込まれる。

日本の生産量は、好天に恵まれたことから、前年を7%上回り100万トンと予測される。国内生鮮消費量も同様に増加が見込まれる。

トルコの生産量は、栽培面積の増加から、前年比べて2万トン増加し、過去最高の110万トンと予測さ

れる。輸出量と国内生鮮消費量も増加が見込まれる。

モロッコは、栽培面積の増加から、前年を26万トン上回る130万トンと予測される。輸出量は、生産量の増加とロシアの需要増に支えられ、増加が見込まれる。

### 世界のマンダリン/タンゼリン需給

(単位：1,000トン)

国名	2011/12	2012/13	2013/14	2014/15	2015/16	2016/17 1月予測
生産量						
中国	16,000	17,000	17,850	19,400	20,200	19,300
EU	3,099	2,927	3,213	3,474	3,054	3,302
モロッコ	730	662	1,160	1,003	1,065	1,325
トルコ	875	876	880	960	1,040	1,060
日本	1,001	846	1,124	1,040	933	995
米国	635	660	700	810	865	899
韓国	586	667	672	697	635	615
アルゼンチン	290	300	370	350	350	280
南アフリカ	146	171	195	203	248	263
イスラエル	166	178	139	203	190	250
その他	233	202	171	152	154	154
合計	23,761	24,489	26,474	28,294	28,734	28,443
輸入量						
ロシア	704	789	852	782	718	730
EU	342	317	369	367	420	350
米国	147	154	182	212	215	215
カナダ	129	143	117	141	146	150
タイ	127	135	139	130	149	150
ウクライナ	179	185	202	125	120	120
ベトナム	202	144	149	158	116	120
インドネシア	200	77	109	87	80	80
マレーシア	69	76	65	70	70	70
フィリピン	78	57	51	54	60	60
その他	39	40	46	51	69	76
合計	2,216	2,117	2,281	2,177	2,163	2,121
輸出量						
中国	840	702	744	736	658	600
トルコ	474	406	532	610	575	580
モロッコ	344	307	501	414	481	510
EU	383	404	349	287	250	260
南アフリカ	122	133	153	157	190	205
イスラエル	83	78	78	93	87	105
アルゼンチン	100	87	88	53	50	45
その他	43	48	38	48	42	45
合計	2,389	2,165	2,483	2,398	2,333	2,350
国内生鮮消費量						
中国	14,568	15,650	16,524	18,053	18,910	18,120
EU	2,711	2,493	2,848	3,206	2,922	3,064
日本	903	780	1,041	959	852	917
米国	592	642	720	759	909	915
モロッコ	386	355	659	589	584	815
ロシア	704	789	852	782	718	730
韓国	480	607	575	535	547	542
その他	1,833	1,741	1,628	1,576	1,665	1,654
合計	22,177	23,057	24,847	26,459	27,107	26,757
加工仕向量						
中国	600	660	600	630	660	610
EU	347	347	385	348	302	328
米国	153	130	131	221	135	160
日本	115	81	90	90	95	100
アルゼンチン	40	63	82	97	110	85
イスラエル	38	30	24	45	40	75
韓国	103	56	93	159	85	70
その他	15	17	20	24	30	29
合計	1,411	1,384	1,425	1,614	1,457	1,457

年産は、北半球は11月→10月、南半球は翌年

注) グレープフルーツ、レモン/ライムは紙面の都合上省略しました。



豪州：「ピンクレディー」の商標権ほか

豪州現地情報調査員 トニー・ムーディー

「ピンクレディー」の商標権

豪州の仁果類生産者を統合した組織である Apple and Pear Australia Ltd(豪州リンゴ・ナシ社: APAL)は多くの国でリンゴのピンクレディーの商標を登録し、世界的規模で商標管理を行っている。また、国際的にピンクレディーの販売促進、ブランドの普及拡大のための資金提供を行っている。(注:ピンクレディーは商標名で品種名はクリスプピンク、オーストラリアで開発された)

チリ産のピンクレディーブランドによる北米市場向けの輸出に関し、商標権、生産許諾権及び販売権について権利を主張する Pink Lady America 社(PLA)とAPALが長年争ってきた問題で、ビクトリア州最高裁控訴裁判所において聴聞会が開かれ、判決が下された。APAL の知的

財産管理課長は、「控訴裁判所は、PLA 社はチリで登録されたピンクレディー商標を使用する権利は有しないとの裁定を下した。今回の決定は、チリ産ピンクレディーの商標に関する APAL の主張を認めたものであり歓迎する」と語っている。

APAL は世界的規模でピンクレディーブランドを保護し、ピンクレディーを購入する消費者が偽物や2級品を掴まされることが無いように努めている。APAL は、その収益を APAL の下に集まった豪州のリンゴ生産者の利益増進のために用いている。

クイーンズランド州の新空港で韓国直行便就航

豪州で最新の空港、ウエルキャンブ空港がブリスベン西方のトゥーウンバに開港した。同空港から2016年末にも韓国向け貨物便が就航し、クイーンズランド州産品の輸出拡大に貢

献することが期待されている。

11月には同空港から香港向けのジャンボ便が就航しており、今回はこれに続くものだ。この空港は民間資本により建設された豪州最大の空港で、2014年に工事が完了した。食品・農業分野の販売活動を支援する組織 Food Leaders Australia の最高責任者は、「韓国向け貨物便の新規就航は豪・韓自由貿易協定の恩恵を享受するのに役立つだろう」とし、「北アジアの日・中・韓3カ国との自由貿易協定は、農産物輸出拡大の契機となるものである。中国向けには酪農製品や牛肉輸出の交渉が行われているが、日本と韓国は、生鮮果実・野菜の市場として有望だ」と述べている。

ウエルキャンブ空港は、中東、中国等との貨物便就航の交渉が進められている。

フランス：静かなブームのポモロジー

フランス現地情報調査員 佐川みか

フランスではポモロジー(果樹園芸学)が静かなブームを呼んでいる。ポモロジーとは果樹の品種を特定・分類して、その特徴を記述し、保存のために栽培する活動である。フランスでは17世紀ごろ誕生し、18世紀に最盛期を迎えた。その当時は、品種改良のために国もポモロジーを奨励した。現在は、品種改良は遺伝子学などが発達して、専門機関や種苗業者がもっぱら行っていて、ポモロジーは、果樹に興味を持つ素人の活動になった。忘れられた品種や、知られていない野生の品種を求めて、野道や林を歩き回り、時には人家の庭を見させてもらい、珍しい果実や果樹が見つければ、品種を特定して育成する。ポモロジー(pomologie)も、リンゴ(pomme)も果実一般を示すラテン語 pomus から生まれた言葉であるが、仏人はポムと聞けばまずリンゴを思い浮かべる。そのせいいかどうかは分からないが、ほとんどの団体がリンゴを対象にしている、ごく少数の団体がブドウ、栗、プルーン、サクランボなども扱っている。あるポ

モロジー協会では、加入条件として、会費の負担だけでなく、1本以上の果樹を育てることを決めている。またある団体は、土地の確保が難しいため、高速道路の管理会社を説得して、道路の脇の斜面に果樹を植えさせてもらっている。品種の特定だけでなく、果樹の栽培技術(剪定、肥料など)の講習会を開いているところもある。

このような団体の多くは1970年代に設立された。ちょうど、農業の近代化が進み、これまでのポカージュと呼ばれる農村風景が、広大な農地に変わっていった頃である。ポカージュは、畑と畑の境に作られた垣が特徴である。盛り土をして、その上に雑多な樹が植えられている。数世紀かけて形成された垣には果樹もあった。農作業の合間に果実を摘んで食べたり、沢山あれば、家族が籠を持って取りに来た。そこにトラクターを導入する集約的な農業が始まり、垣は取り払われ、地域の果樹品種は野鳥などと一緒に激減した。1873年に種苗家アンドレ・ルロアが書いた「ポモロジー辞典」は、今も参考にされているが、

この辞典には527種のリンゴの品種が挙げられている。

しかし、土地整備だけではなく、法律が品種減少に拍車をかけた。フランスの農作物の「公的品種カタログ」は1932年に最初に作られた。地方によって、違う品種が同じ名称で売られていたり、同じ品種が違う名称で売られていたことから、混乱を避けるためであった。その後の度重なる改革で、公的カタログは商業利用に適する品種に絞られていった。まずは、特性がはっきりしていて、土地や気候などの多少違うところでも均質な作物が穫れ、年により収量が変動しない品種に限定され、さらには、味や、生産性、保存などに優れた標準化された改良品種だけがカタログに登録されるようになった。フランスではそれ以外の品種の種苗を農業用に流通・販売することは禁止されている。農業者同士が農業生産のために種苗を交換することも流通とみなされる。こうした禁止に違反すると「製品・サービスに関する不正行為及び偽造の罪」に問われる。種苗を売ったり、交

## (公財) 中央果実協会

### 編集・発行所

公益財団法人 中央果実協会

〒107-0052

東京都港区赤坂 1-9-13

三会堂ビル 2階

電話 (03)3586-1381

FAX (03)5570-1852

### 編集・発行人

今井 良伸

### 印刷・製本

(株)丸井工文社



毎日くだもの200グラム運動

### 当協会のweb サイト

[www.kudamono200.or.jp](http://www.kudamono200.or.jp)

本誌について、ご質問、お気づきの点、ご意見がおりになる場合や、転載を希望される場合には、上記にご一報下さるようお願いいたします。

本誌の翻訳責任は、(公財)中央果実協会にあり、翻訳の正確さに関して、

### The World Apple Report ASIAFRUIT

は一切の責任を負いません。なお、意見に渡る部分は、それぞれの著者の見解であることをお断りします。

## トピックス 品種 Sumo

(ASIAFRUIT 誌 2016/12・2017/1号)

種無しで皮が剥きやすいマンダリンは、ここ数年来、欧州・北米で人気を博している。しかし、アジアでは何百年にも渡り主要なカンキツである。日本の消費者は最も美味しいマンダリン品種といえるデコポンを享受してきた。オレンジとマンダリンの血を引いたデコポ

を換しなくなれば、品種の存続は極めて難しい。その結果、ある地域だけで生産・消費されてきた果実は、元々の産地からも姿を消してしまった。

パリから約250km 南に位置するベリー地方のポモロジ協会が1997年に発見したリンゴは、偶然の交配から生まれたようで、系譜が明らかでない。Razot と名付けられて栽培され、2016年には、知的所有権の対象にならない優秀な作物に与えられるフリーブリーディング賞を受賞した。この賞は、スイスの環境保全団体が実施しているものである。Razot

を発見したポモロジ協会の会長ルネ・マランドン氏は「二千から三千の種から一つぐらいこういう優秀な品種を発見することがある」と語っている。もっと人に知られて、栽培されるように協会は種木を分けているということである。

最近では、農薬散布の削減が仏農業省の課題になっていて、その観点から、自然の防除能力の高い品種を求めて、品種改良の公的機関などがポモロジ協会の活動に熱い視線を送っているらしい。そして、ポモログ(果樹園芸学愛好家)たちは、忘れられたリンゴを求めて、今日も野を駆け巡っているようだ。

## 成長中のタイ果実市場

### タイ現地情報調査員 坂下鮎美

Thai AC Interfresh 社は国内外で果実の輸出入及び販売を手がける企業である。2009年に会社が設立されてから現在までに6つのブランドを構築し、主に中国、台湾、米国、アセアン諸国にドリアン、ココナッツ、バナナ、竜眼、マンゴスチン等を輸出販売している。また、同社は日本や米国、豪州等からリンゴ、サクランボ、イチゴ、ナシなどの果実を輸入しており、タイ国内の主要スーパーマーケット、Tops や Big-C、Makro、Max-Value、コンビニエンスストアのセブン・イレブンで「グレートフルーツ」、「Happy B」、「Dr.Pear」などのブランドで販売している。

社長アラク・ウィブンポン氏によると、同社の販売する果実は産地や栽培農家を厳選しているため、海外の市場でも十分競争することが可能な品質であるという。海外に輸出する果実については、国内の果実栽培農家やコミュニティー企業が同社の生産チームを派遣して品

質を管理しており、そのための専門チームが同社にある。また、新鮮な状態で消費者の手に届くように、ポストハーベストや輸送に関する技術に関しても常に新たな技術を開発導入し、一定の品質基準を維持している。

こうした努力により、同社の売上は2014年度の7,431万バーツから2015年度には、9億5,471万バーツに跳ね上がり、純利益は2014年度の70万バーツから2015年度には、2,232万バーツに増加した。2016年度の最終的な売上は11億5,000万バーツになると予測しており、内訳は輸出が10億5,000万バーツ、輸入が8,500万バーツ、国内の販売が1,500万バーツになるという。

同氏によると、果実市場は国内外で消費者の需要が高いことから、今後も成長すると予測しており、新たな輸出入市場を開拓していくとのことである。また、経営効率を上げるために、1年後を目途に同社をタイSET市場に株式上場させるとのことである。

【2017年2月の為替は1バーツ=約3.3円である。】

かい。しかし、食べてみるとカンキツの中でも美味しい品種の一つであることがわかる。Sunstreet 社の副社長によると、「Sumo は並外れたフレーバーがあり、カンキツの中で最も素晴らしく、果皮の「コブ」が大きいほど美味しい」とのことだ。カリフォルニア州では販売シーズンは1月中旬に始まり5月まで続く。同社はオーストラリアでも栽培の権利を取得しているが、ペルー、スペインでも栽培を進め、周年の販売を目指している。